

人文学・社会科学を軸とした学術知 共創プロジェクトの事業を終えて

事業総括者
盛山和夫

2023.7.25

人文学・社会科学特別委員会

学術知共創プロジェクトが めざしたもの

(実施機関むけの公募要領より)

- 専門性の深化がかえって「現代社会の課題への対応」や「マクロな知の体系化」を難しくしている。
- 自然科学との連携が求められているが、人文学・社会科学が主体となった協働が難しい。
- これらの課題を克服するため、社会的課題を見据えて、人文学・社会科学の知がどのように貢献でき、何をなし得るかを考察するプロセスの体系化を目指す。
- 多様な研究者やステークホルダーが知見を寄せ合って、研究課題及び研究チームを創り上げていくための「共創の場」を整備する。

なぜ「共創の場」か

- 研究チームそのものではなく「共創の場」
 - 人文学・社会科学の**知の革新**をめざす。
 - 具体的な研究の展開ではなく、学術の革新を見据えた戦略的な研究テーマの探索をめざした「**フォーラム**」。
 - 多様な観点、研究者の交流により、現代の社会課題を見据えて、人文学・社会科学の知の革新をもたらすような戦略的な研究テーマと研究チームの構築をめざした**議論とコミュニケーション**。
- 科研費、とくに特推や基盤Sでは、どうしても「確実性の高いと見込まれる研究」を重視する傾向。
- それに対して、ここでは「人社系学問の＜学術的革新＞をめざすような知的探究」を重視。
- 2021年度から、学術振興会において、課題設定の先導人社事業「学術知共創プログラム」が発足——ここでは、より具体的な研究を支援。

成果と反省

- 堂目先生、小出先生のリーダーシップの元、13回のWS、3回のシンポジウム、5回の対談インタビュー、4回の展開インタビュー、そして7個の研究チームの構築と先導人社や科研あるいはJSTのプログラムへの**応募と採択**。
- 極めて多彩、内容豊か。
- 事業運営委員会の諸先生からも積極的で適切な提言
- ただ、公募要領のもととなった2019年9月の『人文学・社会科学を軸とした学術知共創プロジェクト（中間まとめ）』にあった「人文学・社会科学固有の**本質的・根源的問い**」という観点が、若干、当初の意図ほど十分に意識されなかったかもしれない。
- また、ワークショップでは、多様性とopennessを重視した人選が進められたが、必ずしも問題の掘り下げが進展したとはいいいにくい面があった。参加者の問題関心がややバラバラ過ぎたと感じられた。
- 今思うと、**共創の場**には、一定の「**問題意識の共有**」が必要。
- 議論の進化・展開には、テーマ代表者などのリーダーシップが必要。
- 研究チームの構築については、テーマ代表者や堂目先生たちのリーダーシップの役割が大きい。

人社系学問が抱えている問題構造

- 純粹にそれ自体の「学術」としての**内在的問題**
（自然科学の主導する課題への協働の困難ではなく）
- 学術としての**progress**が見えない（当該分野の研究者を超えて、他の研究者、より広い学術コミュニティにおける「意義づけ」が見出しにくい。まして、自然科学研究者や市井の人びとにとっては、「**どんな意義のある研究が生み出されているか**」が見えにくい。）
- **知的わくわく感**（excitement, exhilaration）が弱い
- 問題は、「社会的インパクト」の弱さではない。
- 『科学技術・イノベーション基本計画』では、「社会的価値を生み出す人文学・社会科学の「知」と自然科学の「知」の融合による「総合知」により、人間や社会の総合的理解と課題解決に資する政策」（p.9）が推奨され、この観点で人社系が「意義」づけられているきらいがあるが・・・

人社系学問の特性と困難

- 根本的特性＝意味世界の探究
 - 価値、意味、思想（たとえば、「正義とは何か」「いかなる社会が望ましいか」など。ほかにも、「縄文人の心」、「東欧の歴史記憶の政治」など。）
 - むろん、経験科学の側面も大いにあるが。
 - しかし、「原理的に経験的データで検証可能」という方法には依拠できない。
- たとえば、次のような現代的課題
 - 大学への入学においてアファーマティブ・アクションは許されるか？
 - 生成AIについては、どのような規制やルールを設けるべきか？
 - こうした「規範的問題」については、「経験的データ」だけでは学術としての結論を導くことはできない。
- あるいは、
 - 今日の先進社会において、なぜ民主主義の危機が生じたのか。そしてそれは、いかにして克服できるか。
 - このような「歴史的に個別の事象」については、どんな学説についても「検証の再現性」はありえない。
- 評価、真理／虚偽の見極め、の難しさ → Progressの見出しにくさ
- しかし、学術として「真理」や「より正しい知識」の理念を放棄してはならない。

本当は、実践的な人社系学問

- 世間的には、「虚学の傾向が強い」「何の役に立つか分からない」・・・とされている。
- これは、完全に誤解であり、錯認。
- 人社系の根底は「実践的課題を引き受けて、答えを知として探究する」こと。
 - 典型的には、**法学**。**哲学**は多様な課題を引き受けている——「何のために生きるか」「何がどのような理由によって規範的に正しいか」「真理とはなにか、知識の根拠は何か」・・・
 - **政治学**は「よい政治システムのあり方」を。**経済学**は「どのような政策が経済的に望ましいか」を。**社会学**は「人びとのあいだのよき共同性はいかにして可能か」を、それぞれ探究している。
 - **歴史学**は、過去の社会的世界における人びとの思念や決断や制度や出来事や集合行動などのあいだの関連のしかたを探究する。よい探究は、われわれの知的関心に大きく響いてくるが、それは、「現実においてわれわれをとりまいている諸課題」についての観点やとらえ方などに関して、漠然とであれ、われわれの知的関心に答えるものがあるからである。たとえば、「ロシア史・東欧史」など。

人社系学問の困難

- 端的に、「どの知識が他の知識よりもよりよいものであるか」について、学術コミュニティでの一定の合意をうることが、自然科学よりもはるかに難しい。
- 経験科学ではない。観測装置を工夫してニュートリノの質量の有無を判定したり、青色ダイオードやIPS細胞のように実際に何かを作り出す、というわけにはいかない。
- とはいえ、人社系の世界でも20ないし30年くらい前までは、ある種の「知的権威主義体制」があって「学術界での階層構造」を形成維持していたように思う。
- しかし、幸か不幸か、今日、そのような権威主義体制は極めて弱体化し、その結果として、「どの学説が学術を前進させているか」についての共有された判断を持つことが困難になっている。
- **評価の難しさ**
 - 各研究を評価するのに、自然科学と同じ基準ではいけない。が、ではどうするかは明確ではない。
 - 専門化の強まりのなかで、学術界のコミュニティとしての性格が弱まる。
- しかし、**学術コミュニティ内での自由で開かれた、活発で理性的な議論**を通じて、道理的な学術的合意をうることは可能。

人文学・社会科学の振興支援

3つのポイント

1 人社系学問の「**学術としてのProgress**」に向けての支援

- 個別の研究テーマそれ自体としてだけでなく、その探究が、学術としてどのようなProgressに志向し、その実現可能性はどうか、を重視。
- 学術としての「**本来的な課題**」を意識。技術的イノベーションではなく。また、自然科学への補佐的機能ではなく。
たとえば、直接的には「〇〇の不平等はどうなっているか」という経験的事実の探究をテーマに掲げながらも、「なぜそのような不平等が存在し、その問題状況はどのようにして改善しうるか」という「**理論的**」探究に踏み込む、そういう研究。
- **専門性を超えて**、学術のProgressをめざす。
- 人社系の本来的な「**実践性**」を踏まえ、「**社会的課題**」を意識する。

2 プロジェクト型共同研究の意義

- Study group型の研究体制（共創の場と研究チームとの中間形態）
共創型共同研究
厚労省の「研究班」に類似 ただし、「具体的な公衆衛生上の課題」ほどの具体的な課題を探究するのではなくて、より根源的な問題を視野に。
- 「面白そうだけれど、リスクのある研究」と、「ほぼ確実に成果がえられるけれど、あまり面白くない研究」の、どちらを支援するか。
- 多様な背景をもつ研究者。人数制限を緩和（特推や基盤研究は「少数で」を謳っているが、その必要はない。）
- 人社系学問の本来的な実践性を基盤に、人類や社会にとっての**実践的課題**に取り組む。そのためには、自然科学を含む多様な研究者からなる有機的チーム。
- ただし、研究代表者は、全体をまとめて実効性のある運営、学術的Progressへの志向に努める。
- 単に、ばらばらの個別研究チームの寄せ集めではなく。

3 成果をできるだけ見える化する

- 支援された研究の成果発信によって、人社系学問に対する人びとの認識の改善や理解の増進が促進されることをめざす。
- 成果発信は、「専門領域での研究者むけ」だけでなく、「一般社会向け」も。
- たとえば、「成果発信のための経費支援」枠を用意し、採択された場合、研究終了後あるいはその1, 2年前に、それへの応募を可能とする、など。その場合の「成果発信」としては、「一般社会向けの図書（たとえば新書）」とするなど。
- 公開シンポジウム、HPなどを準義務化。
- 学術コミュニティにおける成果の共有、議論の活性化
- 緩やかな助言システム
 - 採択されればあとは完全に独立に、ではなく、アドバイザー・ボードのようなしくみを用意。（ただし、基本、励まし）
 - 研究の遂行についてだけでなく、発信のしかたなどについても助言

まとめ

人文学・社会科学にむけて、**学問の特性と固有の課題を踏まえた振興策**は必要。

- 確実性よりは、リスクがあっても学術的に意義の大きい探究課題へのチャレンジを重視する視点。
- **知的わくわく感の再興**。
- 技術的ではなく、学術の固有の課題に沿って。
- Study Group型（共創型）の研究チーム。しかし、単なる「おしゃべり会」に終わらないよう。
- 本来的な実践性を活かす。
- 狭い分野を超えた共同研究。ただし、個別研究の寄せ集めに終わらないように。
- 学術としての革新に寄与するという観点。それを審査評価するシステム。
- 学術コミュニティ内で、以上のような問題意識の共有が期待される。